

# まなほ



このページは男女共同参画についての学びを深めようということから企画されているページです。

未曾有の震災を経験した日本。その後も様々な災害に遭遇してきた。今年も西日本豪雨、大型台風の襲来、北海道胆振東部地震と災害は続く。さまざまな情報が伝えられる中、自分が災害に遭遇したらどうするか…。今から自分にできることは？ 過去の災害から学ぶことは多いはず。

## ～災害、私たちの備えは？～



### ●自分の身は自分で守る……

「自助・共助・公助」という言葉がある。「自助」は自分の身を自分で守ることだ。青森県は今年、防災ハンドブック「あおりおまもり手帳」を県内全世帯に配布した。地震や風水害だけではなく、火山噴火など災害ごと取るべき行動がとてもわかりやすくイラスト入りでまとめられている。あらかじめ備える物もチェックリストとして載っているの、家族構成や季節により必需品をプラス記入して活用したい。食品などは消費しながら蓄えるローリングストックを習慣づけると期限切れという無駄は防げる。「必ず食べる物だから」と考えれば購入時の気持ちの負担が少し減るのでは？ 北海道胆振地震では大規模停電の中、電池で聞くことができるラジオが大きな役割を果たしたという。とりわけ地元のコミュニティFM局は、地域の情報のみならず音楽を流すことで暗闇で過ごす不安を軽減する効果をもたらしたということだった。過去の状況も参考に自分なりに自分を守るための準備をすることが大切だ。

### ●混乱の中で避難所は？

平成25年に内閣府では「男女共同参画の視点からの防災・復興の取組指針」を出している。避難所の取組は、授乳室・男女別のトイレ（特に女性のトイレが混みやすいので増やす）・更衣室・物干し場など配慮したスペースを設けるなどとなっている。しかし、熊本地震の避難所における調査では、地震発生から一ヶ月の間に市町村が達成できた項目（平成29年度版 防災白書）で、男女別のトイレの設置や間仕切りによるプライバシーの保護・避難所の運営体制への女性の参画は徐々に改善されつつあるが、女性専用の物干し場の設置・性別や年齢による固定的役割分担に基づく運営をとらないこと・女性や母子専用エリアの設定の取組は低く1割を切る達成項目もあった。数字を見るだけでは、まだまだ必要なことがあると思われるが実際に避難所の運営となると、現場では大変な苦勞があり労力を要している。性別を超え全ての人々が協力して改善していくことが望まれる。

避難先での表面にでにくい問題に、女性や子どもに対する暴力・性暴力がある。報告されないものも合わせるとかなりの件数になるという。安心安全のため人権を守る取組が更に求められている。

### ●コミュニティの大切さ

甚大な災害の場合「公助」には限界があるといわれている。そのときに必要とされるのが「共助」といわれているが、地域コミュニティである町会活動も、現在は担い手不足や加入率の低下が課題となっている。町会加入の促進と、地域住民が集まるイベントやまつりなどでお互いを知り、関係を構築していくことがもしものときの「共助」につながるかもしれない。特に弱い立場の高齢者、障がい者、子ども、情報が伝わりにくい外国人などにはサポートが必要になる。

災害は一瞬にして人々の生活を変えてしまう。時間を経ても東日本大震災や熊本地震で被災し仮設住宅での暮らしを余儀なくされている方がまだまだたくさんいる。災害が発生してから時間がたった今、コミュニティが失われ以前より孤立している高齢者も多い。コミュニティはさまざまな場面で人の支えになるということは言うまでもない。